

発表タイトル	田山花袋の翻訳・翻案に関する調査研究 明治34年「村長」における 「受容化(domestication)」と「異質化(foreignization)」の問題
発表者所属名	日本文学研究専攻
発表者氏名	屋代(高野) 純子

発表内容

本発表は、花袋の「村長」(モーパッサン「ロックの娘」原題 “La Petite Roque”、英訳本 “The After Dinner Series” 第十巻所収 “Little Louise Roque” からの翻案。執筆時期は明治34年10月27日から12月2日。初出は、明34・12「文芸倶楽部」)を分析対象として、この作品において、翻案という行為による「受容化(domestication)」と「異質化(foreignization)」の問題がどのように現れているかを考察することを目的としたものである。

「受容化」と「異質化」とは、翻訳研究者ヴェヌティ(Lawrence Venuti)が “The Translator’s Invisibility: A History of Translation” (1995) 等の著作の中で理論化し、「翻訳行為と文化や社会、イデオロギーなどを関連させて研究するとき、一つの分析方法として有効なもの」(*1)と評価されている概念である。

この理論において、「受容化」は翻訳されたテキストが言語的・文体的、あるいは文化的な違和感を感じさせず、「流暢な」「読みやすい」目標テキストとなり得るよう、異質性を排除する翻訳手法を指す。これに対して、「異質化」は、起点テキストの文化的異質性が感じられる要素をも翻訳可能にする新たな翻訳手法を開発することを意味する。

後者にあたる「異質化」という翻訳手法は、翻訳原本の異質なアイデンティティを前景化させ、目標テキストの文化的価値観に暴力的に順応させることを避ける意義があるとされる。それゆえ、翻案という行為により、目標テキストの文化的価値観に寄り添うかたちでの改変が行われることは批判の対象とされてきた。

それにもかかわらず、今回、明治期の翻案小説を分析するにあたって、あえて「受容化」と「異質化」の理論を援用したのは、「村長」が日本の文化的価値観に近づけるような、あるいは同時代のメディアの動向と繋がるような、数々の改変を加えている「受容化」の側面だけでなく、外国作品の異質なアイデンティティを完全に消し去るのではなく、その痕跡を残した日本語の小説として再編成されている「異質化」の側面をも評価したいと考えたためである。

	“Little Louise Roque”	「村長」
発見者	Mederic Rompel The postman	賢さん 郵便配達夫
被害者	Little Louise Roque The little girl	柴崎のお菊 15歳の少女
犯人	M. Renardat The Mayor of Carvein	町田光義 榎下村の村長

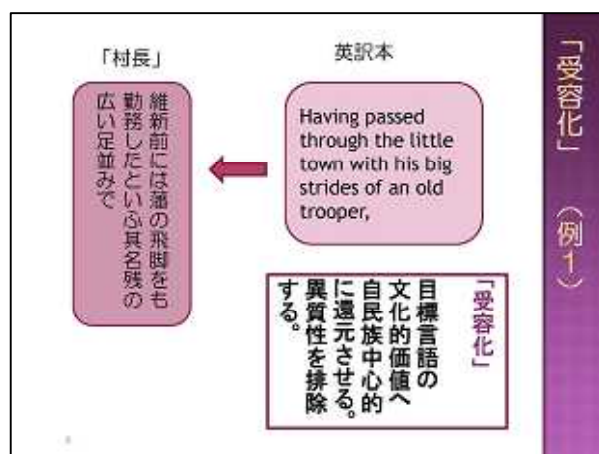
● 英訳本と「村長」(初出雑誌掲載時)

作中人物の対照表

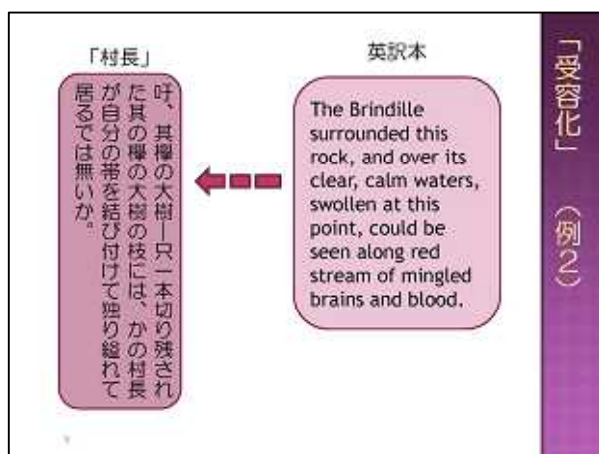
モーパッサン「ロックの娘」(原題 “La Petite Roque”)
英訳本 “The After Dinner Series”第十巻所収
“Little Louise Roque”からの重訳

モーパッサン「ロックの娘」は、強姦殺人事件をめぐるミステリー小説的展開があり、少女の亡霊によって真犯人が苦しむといった場面をも含む作品である。英訳本からの翻案作品である、花袋の「村長」においても、左記の表の通り、作中人物の対照性が認められる。「村長」においては、榎下村の村長町田光義が真犯人であり、被害者となったのが柴崎のお菊、第一発見者が郵便配達夫の賢さんとなる。

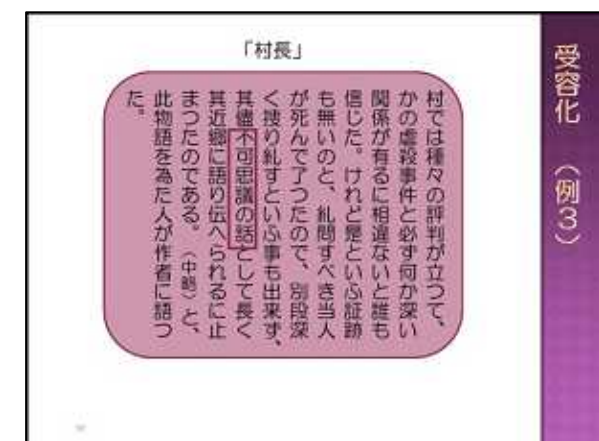
英訳本から「村長」への翻案行為における「受容化」、すなわち、日本において、言語的・文体的



あるいは文化的な違和感を、読み手に感じさせないようなテキストへの転換が行われている例としては、例えば強姦殺人の第一発見者となる、郵便配達夫の賢さんが「維新前」に「藩の飛脚」であったという設定が挙げられる。英訳本では、“an old trooper”（兵隊あがり）とされている部分であるが、作品舞台が日本に置き換えられる中で、作中人物の経歴に、近世日本社会における属性が付与された例である。また、真犯人である村長の自殺の方法にも、「受容化」の側面が認められる。英訳本のルナルデは、塔から身を投げて城壁の下の岩に頭を打ち砕かれて死んでいき、作品の終末には、その岩を取り巻くブランディーユ川に脳みそと血が混じりあった赤い筋が流れていく様子が示される。それに対して「村長」では町田光義が樺の大樹に自分の帯を結び付けて縊死するのであり、日本の着物の帯が用いられた自殺方法となっている。

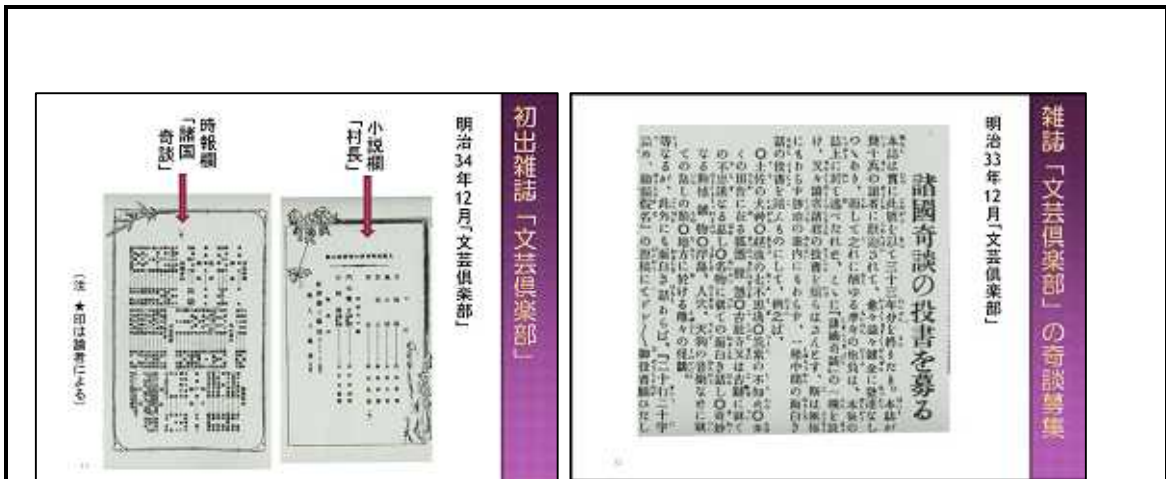


以上のような作中人物の設定や行動様式の側面だけでなく、作品「村長」には、同時代の日本の文学状況やメディアの動向の反映も考えられることを、次に指摘していきたい。



「村長」の末尾には、村長の死と虐殺事件との因果関係に関して真実が詳らかにはならず、これら一連の出来事は「不可思議の話」として、長く其近郷に語り伝えられたというように、「此物語を為した人が作者に語つた」と記されている。先行研究において、昔話の語りの様式との関係が指摘されている(*2)ところであるが、同時代状況を鑑みれば、「村長」発表前年の明治33年12月に

「諸国奇談の投書を募る」の記事が、雑誌「文芸倶楽部」に掲載されて投稿募集が始まり、同誌「小説欄」に「村長」が掲載された明治34年12月「文芸倶楽部」の「時報欄」にも読者からの投書による「諸国奇談」が載っているというように、読者参加型の諸国奇談掲載が継続していた事実が存在する。掲載誌においてこのような状況があることから、翻案作品「村長」の末尾は、同時代の読者が奇談に関心を寄せた動向を反映させた結びになっていると見ることが可能となるのではないだろうか。



その一方で、こうした「受容化」の側面だけでなく、「異質化」の側面も、翻案作品「村長」には認められる。例えば、三人称の「渠」の使用がその一例であろう。三人称の人称代名詞が、近代文学の用語として、あるいは技法として大きな役割を果たしてきたこと、それが日本においては翻訳



調の文、西欧文の影響を受けた文を書く上で発達してきたことは、柳父章氏の論において夙に指摘されているところである。(*3)

発表者は、昨年9月、本学 RT 事業の支援を受けて、群馬県館林市の田山花袋記念文学館において、収蔵されている花袋の翻訳・翻案に関する原稿3点および9点の洋書に関する研究調査をさせて頂いた。「村長」の原稿(5章途中までが現存する)も、この時の調査内容に含まれており、夥しい削除・加筆が施され、西洋

文学を日本語で書かれた文学に転換していく上での苦心の跡を示すものであった(*4)。

先行研究において、この翻案作品「村長」は原作との比較から、未成熟な作品という評価が与えられ続けてきた。しかし、異なる文化間の「受容化」「異質化」双方の諸要素の相克する場として捉え直すことで、この翻案作品を再評価していくことができるのではないだろうか。本発表で指摘することができたのは、作中における「受容化」「異質化」の諸要素の一端にすぎないが、これらの要素に着目しつつ、更なる分析を進めていきたい。

- (*1) 齊藤美野「翻訳行為における異なるものの存在」(平 21・3 「翻訳研究への招待」第3号)
- (*2) 杉井和子「明治の翻案小説における描写と語り 「村長」田山花袋について」(平 14・3 茨城大学人文学部紀要「人文学科論集」)
- (*3) 柳父章「翻訳となにか」(昭 51・8 法政大学出版社)
- (*4) 拙稿 高野純子「明治期における翻訳・翻案に関する一考察 花袋「村長」を分析対象として」(平 23・3「田山花袋記念文学館研究紀要」第23号)